

図書館だより No. 4

平成 30 年 7 月 20 日発行

観測史上初の早さで梅雨が明けてしまった今年の夏。毎年、暑い暑いと言いながら夏を過ごしていましたが、今年の暑さは並大抵ではありませんね。せつかくの夏ですが、この暑さでは、涼しい室内で過ごす時間が多くなりそうです。今年も気づけば半分が過ぎました。この辺で本格的な夏の大掃除を試みるのはどうでしょう。収納の仕方を見直してみたり、模様替えをしたりしていると、いい気分転換になるはず。楽しみながら、やってみましょう！

2年生は来月末にニュージーランドへの修学旅行が控えています。今学期にしっかりと事前学習をしましたが、図書館にはニュージーランドのガイドブックや英会話の本をたくさん揃えました。夏休みを使って、さらに修学旅行の準備を進めましょう。

片づけのことを根本から考えてみる

527-ス『片づけの解剖図鑑』 鈴木 信弘 || 著 エクスナレッズ

冒頭に書かれているようにこの本は散らかった部屋を魔法のように片づける技術を伝授してくれる本ではなく、「住宅そのものを見つめなおす」ことで、今自分が暮らしている空間が、なぜ片付かないのかを考える本です。というと、難しそうに聞こえますが、この本おもしろいです。「リビングの片づけは、テーブルを小物置き場の役割から解放させてやることから始まる」、「誰も座らないソファは、居候を決め込んだ大男と同じ」など、上手い例えで納得のいく片付かない原因を教えてください、「そういうことなら、こうやって片づければいいのか」と自分の空間を見直す意欲が湧いてきます。

空港は楽しい

687-サ『最高の空港の歩き方』 齊藤 成人 || 著 ポプラ社

空港には飛行機に乗るだけのために行くだけでは、もったいないくらいたくさん楽しみがあることを知っていますか。今空港はそれぞれが特色ある施設を持ち、フライトのためだけでなく、空港を楽しみに人々が訪れているのです。例えば、新千歳空港や中部空港(愛知)には温泉があるし、羽田空港には無料の美術館があるし、宮崎空港にある「カフェ カンナ」ではガンジスカレーという絶品カレーがあります。飛行機で旅する時には搭乗時間に余裕をたっぷり持って空港を訪れ、空港内を巡り、新しい発見やおいしいグルメを楽しんでみてください。



猛暑を乗り切るためのおすすめ本 493-イ『熱中症対策マニュアル』 稲葉 裕 || 監修 エクスナレッズ

この夏の暑さで、とにかくみなさんに気をつけてほしいのが熱中症です。炎天下で過ごす時、運動をする時は、もちろん、室内で過ごす時にも注意が必要です。自分は大丈夫と思わずに、どんな症状が起こるのが熱中症なのか、そして、正しい予防の仕方や応急処置をしっかりと頭に入れておきましょう。何となくこうだろうと思っていたことが実は違っていたり、予防のために気をつけることは年代別にポイントがあると知ったりと、読んでおいてよかったと思う基礎知識が掲載されています。

596-ソ『簡単！極旨！そうめんレシピ』 ソーメン次郎 || 監修 扶桑社

さっぱりと涼やかなものが食べたくなる夏の定番といえば、そうめんですが、あまり続いてしまうと飽きてしまうし、栄養もちょっと心配です。でも、その悩みもこの本があれば大丈夫。そうめんのアレンジといっても薬味やつけ汁を変えてみるくらいしか浮かびませんでした。もっと自由に今までになかったようなアレンジで、そうめんをおいしくいただけるレシピが揃っています。様々な食材を使っているのだから栄養面での心配もなし。たくさん試してみてください。

B292-タ『ガンジス河でバタフライ』 たかの てるこ || 著 幻冬舎

20歳の夏、ありったけの勇気を振り絞って、海外ひとり旅へと飛び立った著者たかのてるこさん。飛び立つ前は不安だらけだったけど、いざ目的地に降り立った瞬間から全身全力で旅を楽しみ始めます。何もかもがノープランのひとり旅。ガイドブックもないから、頼りになるのは行く先々で出会う現地の人や旅人たち。言葉が通じなくても、行きたい！食べたい！伝えたい！その思いがあれば、心は繋がり、人の輪が広がっていくのだと身を持って証明してくれるパワフルな旅です。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

無条件に新作を読みたい作家さんが何人かいます。あさのあつこさんもその一人です。『バッテリー』(913.6-ア 角川)、『No. 6』(913.6-ア 講談社)で味わったあのワクワク感。そしてまた、新しい興奮(?)を得られるのを期待して新刊を手に入れます。『ぼくがきみを殺すまで』(913.6-ア あさの あつこ || 著 朝日新聞出版)も裏切られることなく、最後まで一気にページをめくって物語の行きつく先にハラハラしながら読みました。そして本を置いて深くため息をついた後、タイトルの意味について考えさせられました。結局、誰が“ぼく”で誰が“きみ”なのか。そう考えたとき『X-01』(913.6-ア 講談社)を出版した時のあさのさんの言葉を思い出しました。「『No.6』で書ききれなかったものを形にしたい…」この本もまた、その思いが続いているのではないのでしょうか。圧倒的な絶望の中に射す一筋の希望。人は結びつくこと、信じること、想うことで、人の世を変える力があると…。読み終わった後も、物思いの続く本でした。 [鈴木]

そうだ、先生と本のことを熱く語ろう!! ~大藤先生編~

司書(以下 司): 今まで大藤先生と本の話をしたことがなかったのですが、この間、カズオイングリッドを読まれると聞いて、意外な作家さんを読むなと印象的でした。

大藤先生(以下 大): 意外ですか(笑)でも、私、文学部出身なんですよ。

司: えええ! そうなんですか。

大: イギリス文学を勉強していて、ヴァージニア・ウルフという作家さんを専門に研究をしていました。ちょうど第二次大戦間期くらいの作品を書いている人で、小説だけど哲学的なんですね。ただ、内容は暗いです。

司: その人を研究しようと思ったきっかけは何だったんですか。元々好きな作家さんだったとか?

大: 研究するにあたっては文献があるかとかも重要ですが、女性の作家をしたいなと思っていて、哲学的な内容に興味を持ってヴァージニア・ウルフを選びました。カズオイングリッドも大学に入ってから読みましたね。

司: なるほど。カズオイングリッドは何をまず読みましたか。

大: 『わたしを離さないで』です。カズオイングリッドはイギリス人作家ですけど、日本で生まれているんですね。でも、こ

B933-I 『わたしを離さないで』
カズオ・イングリッド 著 早川書房

の人のナショナルリティみたいなものって、日本にあるのか、イギリスにあるのか、どこにも自分のアイデンティティがないというか、そういう人の本っておもしろいなと思って、『わたしを離さないで』の結末は運命を結果的に受け入れる、って話なんですけど、それってすごく新しいなと感じます。

司: カズオイングリッドの作品は他にも色々読まれたと思うのですが、どれが一番好きでしたか。

大: やっぱり『わたしを離さないで』かな。臓器移植やクローン人間がテーマになっていますが、キャッシーとトミーとルースの三人の恋愛関係も描かれているし、読みにくいと感したら、映画を先に観るといいですね。

司: 映画を観てから原作を読むと、流れやイメージが掴みやすくなりますよね。

大: 映画が好きなので、映画を観てから本を読むことも多いです。

司: ヴァージニア・ウルフについてももう少し聞かせてください。

大: この人の考え方はすごく哲学っぽくて、中心と周縁という考え方なんですけど、権力を持つ裕福な人たち(中心)と、その他の階級の人たち(周縁)とで分かれている社会がひとつの共同体になれば戦争はなくなるって、彼女は考えているんです。カズオイングリッドはそういう考え方でなくて、どこに生まれようがその運命を受け入れようという、仏教的な考え方ですね。その違いがおもしろい。

ヴァージニア・ウルフは結局、自分も中心にいる人だから、無意識に周縁にいる人たちを見下しているところがあって、わざと難しく書くという手法使っているから、結構読みにくいです。

司: ヴァージニア・ウルフで初めて読んだ作品は何でしたか。

大: 初めて読んだのは『ダロウェイ夫人』です。これも内容が難しくって現在と過去を行き来していて今、どっちの話をしているのか見失いがち。慣れていないと、読みにくいな。

B933-U 『ダロウェイ夫人』
ヴァージニア・ウルフ 著 光文社

司: この対談を読んで生徒が「ヴァージニア・ウルフの作品を読みたい」となることもあると思うのですが、高校生が読むには、どの作品がおすすめですか。

大: うーん! ヴァージニア・ウルフはどれも難しいかもしれませんがね。短編もあるんですけど、短編の方がもっと難しく、内容が全然わからないんですよ。だから、とっつきにくいかな…

司: では、せっかくなので大藤先生が読んできた英文学の中から、おすすめを教えてください。

大: おもしろかったのは『ミゲル・ストリート』ですね。カリブ海出身の V. S. ナイポールっていう人の作品です。ナイポールは「中心」に惹きつけられながらも母国に劣等感や閉塞感を感じて葛藤しているのがよく表れた作品で、すごくおもしろい。

933-N 『ミゲル・ストリート』
V.S. ナイポール 著 岩波書店

司: 私は結構、受け身で読めるエンターテインメントな本を読むことが多いのですが、大藤先生は作者の思想や歴史背景なんかもしっかりと頭に入れた上で読書をされていますよね、すごい。

大: あ、でも、そういうサラッと読める作品も好きですよ。『ミゲル・ストリート』も各章ごとに個性豊かで、「クスツ」と笑える街の住人たちが登場するんですが、みんな夢を実現できずにいるんです。気楽に読めて、おすすめです。日本文学だと、『コンビニ人間』を読みまして。あれを読んだら『キッチン』が読みたくなって、そっちらも読みました。

B913.6-E 『キッチン』
吉本ばなな 著 新潮社

司: 『キッチン』、よしもとばななですね。いいですよ。主人公が台所で眠るんですね。

大: 『キッチン』好きです。あの雰囲気、いいですよ。出てくる登場人物たちもいい。

司: 『コンビニ人間』は、お風呂場で眠っていますよね(笑)

大: あれはもう「Just fun!」って楽しむのみで、あまり作品研究せずに読みましたね(笑)おもしろいから、もう一気読み。日本文学だと、思い浮かぶのはそのくらいかな。

司: 逆に私は海外文学をそれほど読んできていなくて、今、頑張って、名作文学チャレンジをしているんですけど今年になってからは『ノートルダム・ド・パリ』と『ドリアン・グレイの肖像』を読みまして。

大: 『ドリアン・グレイの肖像』はオスカー・ワイルドですよ。私はディケンズの『クリスマス・カロール』がすごく好きです。

B933-D 『クリスマス・カロール』
ディケンズ 著 新潮社

司: へー! クリスマスの時期になると、いつも展示していますよ。

大: 意地悪なおじいさんがクリスマスイブに相棒の幽霊と出会ったことで心を入れ替えていくストーリーですよ。冬になるとすごく読みたくなる。

司: そういえば、積読(つんどく:「いつか読もう」と思っているものの、まだ読まずに放置してある本)がたくさんあると言っていましたよね。

大: そうそう! 今、家で積読になっているのは、『半分のぼった黄色い太陽』チマンダ・ソグズィ・アディーエ 著 河出書房新社
933-A 『半分のぼった黄色い太陽』
チマンダ・ソグズィ・アディーエ 著 河出書房新社
大: そうそう! 今、家で積読になっているのは、『半分のぼった黄色い太陽』っていう、これまたどこにも帰属意識がない感じの作家さんが書いている本です。最近の文学の傾向として流行っているんですよ、こういう国籍感のないエグザイル(=亡命者、流浪の身)作家って呼ばれる人たちが。カリブ海とかインドとか今までフェューチャーされてこなかったような国の人が書いている作品って、新しいし、おもしろいなと思っています。

司: 人の読書を知るとおもしろいですね。これを機に、大藤先生がおすすめしてくださった本を読みます。